

「伊勢系」先代旧事本紀の再検討

松 本 弘 毅

一、はじめに

先代旧事本紀は早くから、聖徳太子と蘇我馬子の手になる書であり、日本書紀や古事記に比肩する書であると扱われてきた。^①しかし江戸期に入ってから、実際には古事記や日本書紀、古語拾遺の再編集による部分が大きな分量を占めていること^②等が指摘され、聖徳太子撰を騙る偽書であることが暴かれた。現在では、九〇〇年頃までに成立したと考えられている。^③

最古の歴史書であると思われるいた書が実は偽書であったことがわかり、反動で評価は暴落した。旧事本紀が再評価されるようになったのは、鎌田純一^④の研究があつたためである。鎌田は、記・紀・古語拾遺等の継ぎ接ぎによる本文の中にも、見るべき物部氏関連の伝承が多分に含まれていることや、巻十の国造本紀についても、振り返るべき伝承が多々存することを明確にした。

旧事本紀の現存写本の系統についても、総合的な研究は鎌田純一によってなされている。鎌田純一は旧事本紀の現存諸本を卜部

兼永本系・石川忠総本系・卜部兼右本系・三浦為春本系に分類しているが、全て卜部兼永本から出たという。^⑤鎌田は初め、石川忠総本系諸本（石川忠総本・卜部一本）は兼永本の兄弟本であると論じていたが、後に他の写本と同じく、石川本系も兼永本の系統に属すると論を修正した。^⑥論者も以前、鎌田とは違う理由から、兼永本と石川本との親子関係を確かめた。^⑦また石川本系と三浦本系とは、鎌田論では別系統とはされているものの、実際にはだいたい近い痕跡もあるとの検討結果も発表したことがある。^⑧

残る卜部兼右系諸本は、四系統の中でも異色である。兼右本系は兼右本を祖とする写本群のことであるが、その最大の特色は、今には遺らない系統の写本との校合跡がある点にあると、鎌田は指摘している。その現存しない系統のことを、鎌田は伊勢系と呼ぶ。本論では、この伊勢系という把握の仕方をめぐって再考し、ほぼ通説化している鎌田による旧事本紀の写本系統論には、ここにもなお見直すべき点があることを述べてみたい。

二、「伊勢系」という把握の仕方

鎌田が失われた系統を「伊勢系」と呼んだ根拠はいくつかあるが、複数の論で述べられている論拠を簡潔にまとめると、以下の三点となる。

A、古事記の写本系統との関係。

B、兼右本に「度会神主」の一行があること。

C、神祇本源・元元集等が引く旧事本紀本文に近いこと。

Aから順に見ていく。例えば古語拾遺の写本は、日下部勝皐が早くに「伊勢卜部両本」に分類し、池辺真樸が明確にその差を明言したように、嘉禄本他の卜部系、また亮順本他の伊勢系との二系があることが知られている（暦仁本の位置には諸説ある）。そして古事記もまた、真福寺本系統の写本（真福寺本・道果本・道祥本・春璫本）と卜部本系統の写本（卜部兼永本他）に系統がわかれている⁽¹²⁾。前者については、四本まとめて真福寺本系と呼んだり、伊勢本系と呼んだりする⁽¹⁴⁾。周知のように、かつて道祥本・春璫本はそれぞれ伊勢本・伊勢一本と呼ばれてもいたが、それは田中頼庸『校訂古事記』（一八八七年）に始まるようである。

このように、旧事本紀の写本の系統が論じられる前に、周辺文献を卜部系・伊勢系と分類する先行論が既にあった。特に古事記は、卜部家が日本書紀・旧事本紀・古事記を「三部本書」として尊重していたこともあり、旧事本紀と対にされて書写・保存されていることも多い⁽¹⁶⁾。鎌田はこの古事記の写本との親縁性を特に重視し、伊勢系旧事本紀を想定する根拠としている。

しかしこの鎌田の考えは、古事記の写本系統論にあまりに引きずられすぎている。今も述べたように、古事記と旧事本紀とが対にされて書写されたことは確かであるが、それは卜部系統のものに特徴的なものである。「三部本書」と卜部家で重視されたためにセツトとされたのであるが、鎌田論ではそのまま卜部系外の写本にまで敷衍されて論じられている。古事記の場合には、卜部系以外の写本が真福寺本と道果本以下伊勢に縁の深い写本だった。古事記と旧事本紀の卜部系の写本が対となるのは理解できるが、その系統以外の写本がどうなのかは、全く別の問題と言うべきではないか。

次にBについて見直す。兼永本系と兼右本系とを分かť大きな相違は、卷三（天孫本紀）の一行の有無である。卷三冒頭には饒速日尊降臨に際して供奉した三十二神（とその後裔氏族）が列挙される。九数字で兼右本での三十二神中の順番を示しながら一部掲げる。

⑧天樞野命 中跡直等祖

⑨天糠戸命 鏡作連等祖

⑩天明玉命 玉作連等祖

⑪天牟良雲命 度会神主等祖

（兼右本卷三・二丁ウ）

鎌田が問題とする一行とは、⑪「天牟良雲命 度会神主等祖」の一行である。この一行は旧事本紀の諸写本のうち、校訂私見が入れたらと思しき写本を除けば、兼右本系統の写本にしか存しない。

鎌田はこの一行の、「度会神主」に特に注目する。「度会神主」

表1

出典		
「アメノムラクモ」の有無と位置	なし。 *⑧「天樞野命」の左に「天村雲命麗氣有之」との傍書あり。	*上記傍書にもなし。
旧事本紀 兼永本	なし。 *⑧「天樞野命」の左に「天村雲命麗氣有之」との傍書あり。	なし。
旧事本紀 兼右本	⑪に「天牟良雲命」。 <small>サ イ 本</small>	あり。
旧事本紀 石川本	なし。 *兼永本と同じ傍書あり。 *⑩「天明玉命」の左に「天村雲命イ」と傍書あり。	なし。 *上記二つの傍書にもなし。
元元集 真福寺本	⑪に「天村雲命」。	あり。
麗氣記	⑪に「天村雲命」。	なし。 *「金剛鎖菩薩上首」とあり。
神祇譜伝図記	⑤に「天村雲命」。 *④「天児屋命」の次。	あり。
神祇秘鈔	⑤に「天村雲命」。 *④「天児屋命」の次。	あり。 *「金剛鎖 ^サ 上首」度会神主等祖」とあり。

から考えられる伊勢方面に目をやり、伊勢神道に関する書に引用された旧事本紀との親縁性（根拠C）へと論は展開されている。鎌田は、この⑪「度会神主」行の有無を「単なる偶然でもなければ書写上の誤謬でも勿論なさそう」と言い、また「度会氏によつて補はれたものと仮定してよいやうに思へる」とも述べている。⁽¹⁸⁾つまり鎌田は、古来天村雲命を祖としてきた度会氏が、鎌倉期に⑪「度会神主」行を故意に挿入し、兼右本がその系統の写本と校合して書き加えたという経緯を想定しているのである。また鎌田は⑪「度会神主」行への疑いとして、「このところは、他は××連祖、××直祖と云った記載で、斯様な神主等祖なる記載は他に例がなく問題のある行である」とも言っている。⁽¹⁹⁾

この⑪「度会神主」行について見直しておきたい。問題の行を含む供奉三十二神条については、旧事本紀の写本と当該条を引く神道書類とを見合わせる必要がある。ただし特に問題の行の位置には複数説あり、複雑な様相を呈している（表1）。

元元集は延元二三年（一三三七—三八八）頃の成立で、北畠親房撰と考えられている。元元集は旧事本紀を引用し、饒速日尊降臨の供奉三十二神として掲げているが、麗氣記（鎌倉期以前の成立の両部神道書）と神祇譜伝図記（太神宮神祇本記の上巻に当たり、下巻の倭姫命世記と対をなすとされる書。鎌倉期以前の成立か）、及び神祇秘鈔（度会家行著、元徳二年（一三三〇年）成立の伊勢神道書）はそうではない。麗氣記では「天照皇大神宮鎮座次第」の巻に記されており、皇大神宮の降臨供奉神として三十二神は挙げられている。⁽²¹⁾

「金剛鎖菩薩」との注は「曼荼羅の諸尊に当てはめ」た名であり、

こうした類の名は他の神にも付されている。厳密に言えば、麗氣記所引文は旧事本紀の引用ではない（「旧事本紀曰」等の文言はない）が、大きく関わる（後述）ので一緒に掲げた。神祇譜伝図記は、「神日本磐余彦天皇」の裏書に神武紀四年春二月条を引用し、それに続けて当該三十二神を引く。旧事本紀の引用との文言がないため不明ではあるが、やはり参考として掲げた。神祇秘鈔は「旧事本紀曰」として引用するが、引用後に「已上内宮御降臨時三十二神也」としている。神祇秘鈔は曼荼羅諸尊としての名（²²）は菩薩の意²²と始祖注があり、折衷した書き方である。

右の一覧を見ると、基本的に⑪の位置に問題の行はあることがわかる。石川本旧事本紀の傍書も、⑩の次に書いているため、言っていることは同じである。兼永本旧事本紀等に見られる傍書は、⑧の左傍に「天村雲命」があるかのような書き方をしているが、そこに見える「麗氣（記）」を見ると、兼右本旧事本紀と同じく⑪に「天村雲命」行があり、この点不明である。一方神祇譜伝図記と神祇秘鈔だけは④「天児屋命」の次に「天村雲命」行を配すが、これはあるいは、内宮の荒木田氏の祖である天児屋命に並んで天村雲命が掲げられることがある（神宮雜例集等に見られる）のにならない、それに合わせたためではないかと思われる。

兼永本旧事本紀の傍書に不審な点が残るが、以上のように、問題の一行は基本的に⑪の位置にあったと考える²³。

もう一点の、⑪「度会神主」行への疑いについても見直したい。鎌田は「神主等祖」という言い方が「他に例がな」と言っているが、「他に例がな」いのはこの供奉三十二神の段落内に「神主

等祖」とする類例がないと言っているのか、旧事本紀全体で「神主」という例がないと言っているのか、それがはつきりとはわからない。

仮に供奉三十二神内に「神主等祖」の類例がないということであれば、⑥「天道根命 川瀬造等祖」や⑩「八意思兼神児表春命 信乃阿智祝部等祖」の「造」の祖や「祝部」の祖というの、三十二神内に他に例がない点同様であるが、鎌田は特に問題としていない。一方、旧事本紀内に「神主等祖」の例がないということであれば、巻一（陰陽本紀）に「次天忍立命（纏向神主等祖）」の例があることが見落とされている。なお、「度会神主」なる姓自体、続日本紀和銅四年三月辛亥条に「伊勢国人磯部祖父・高志二人、賜姓渡相神主」と見える通り、古くから存しているものである。いずれの意味であるにせよ、鎌田が「度会神主」という表現を答めていること自体に、また問題が存すると言わざるを得ない。

⑪「度会神主」行の有無については、鎌田の想定とは逆に、「単なる偶然」で当該行の脱落した写本（兼永本旧事本紀に至る）が出来たと考える²⁴。「度会神主」の表記自体も、特に不自然とは言えない。あくまでそこに意味を見出そうとするのならば、伊勢に伝わっていた写本だからこそ、「度会神主」に関わる一行が意識され、卜部系では失われた一行が、結果的に残されたということであり得るだろう。

なお付け加えれば、供奉の神々は、この⑪「天牟良雲命」がないと三十一神にしかない²⁵。もちろん旧事本紀の計数がいつも

正確なわけではないが、①「天牟良雲命」があることでちょうど三十二神になるのだから、本来はあったと考えるのが妥当であろう。

ここまで見てきたように、鎌田が「伊勢系」と呼ぶ根拠のA・Bには直ちに賛成しかねる点が多く含まれている。残るCの、伊勢神道書が引用する旧事本紀と兼右本に影響のあった写本が系統的に近いことは、論者も以前に確認した。⁽²⁶⁾類聚神祇本源や元元集所引の旧事本紀本文と、兼右本傍書等に見られる本文とは、一定以上の近さが確かにある。兼右本が独自の校合を行っているのも確かめた。ただし前論で述べたように、実際には兼右本だけでなく、兼永本にも同様に、異系統（鎌田の言う「伊勢系」）の本文によると思われる傍書が多々存する。兼永本傍書についての鎌田の言及はないが、兼永本にも明らかに異系統との校合跡は存するのである。

鎌田はA・Cをもつて「伊勢系」と呼んだのであるが、実際にはCしか認めるのは難しい。特にA古事記との関係が強く念頭にあり、古事記には存する「伊勢系」が旧事本紀では失われてしまったと論じられているが、卜部系ではない系統に關しての想定としては的を射ていない。以下に見るように伊勢には神祇本源・元元集等とは少し異なる本文を持つ写本も存したようである。

「伊勢系」という呼び方、把握の仕方には一考の余地があるのではないか。

三、伊勢系古事記所引旧事本紀の検討（1） 校合として用いられている場合

伊勢に關係する旧事本紀で、かつ鎌田の旧事本紀論で検討されていないものとして、伊勢系古事記が引用する先代旧事本紀がある。伊勢系古事記とは、ここでは道果本・道祥本・春璣本を指す。かつて小野田光雄が論じ、近くは松本直樹も検討しているように、伊勢系古事記には、先代旧事本紀の引用と影響が見られる。

まず旧事本紀の兼永本に加えて兼右本も見合わせ、また旧事本紀を多く引用していることで知られる類聚神祇本源・元元集も見比べてみた。⁽²⁹⁾伊勢系古事記が引用する旧事本紀と、兼永本・兼右本旧事本紀の傍書や神祇本源・元元集引用の旧事本紀（すなわち「伊勢系」旧事本紀）との異同を調べ、伊勢系古事記引用旧事本紀が、「伊勢系」旧事本紀とどのような關係にあるかを考えたいのである。

表2に掲げたのは、まず伊勢系古事記の傍書に旧事本紀が引用されている箇所である。伊勢系古事記の傍書に「旧事本紀」・「旧事」・「旧事本紀」等として掲げている全二十九例のうち、十例を掲げた。兼永本・兼右本旧事本紀に傍書がなく、かつ類聚神祇本源・元元集にも引用が見られない十九例は掲げなかった。兼永本・兼右本旧事本紀の傍書には異系統（「伊勢系」）によると見られるものがあり、それが類聚神祇本源・元元集と關係があると考えられるので、これらの条件を満たさない例を伊勢系古事記所引旧事本紀と比較しても仕方がないためである。

表 2

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
553	510	182	155	142	125	108	101	77	75	行
比良夫貝	八十怕手／垺	御倉板拳之神	時量師神	可助告	殿滕戸	謂易子之一木乎	美蕃登	筑紫國謂白日別	土左國謂建依別	真福寺本 古事記
夫	垺 均良不足之六千限旧事一 均合 耳不足之六千限舊本紀 天田事本	坂／坂 舊事御倉板拳神	置 時置師神舊事本紀	告／告 吉舊事云々	滕 舊事本紀滕戸云々	謂易子之一木乎 舊事本紀以見謂子之一木替々 舊事本紀以見謂子之一木替々 謂易子之一木乎 舊事本紀以見謂子之一木替々 謂易子之一木乎	美／美 義田本紀	自／自 白方旧事本紀白日別	建／建 連依旧事一連依旧事一連合イ	古事記 道果本／道祥本／春璣本
天／天 夫イ	隈垺	槓板 板槓	置	告	騰滕	唯以一見之謂易子 舊事本紀以見謂子之一木替々	美義 美義	自向 白向	辻速 速イ	旧事本紀 兼水本／兼石本
×	×	板／板	量	告	×	×	美	自／白	速／速	神祇本源 元元集

朱筆と墨筆の違いは、本論では無関係と判断したため特に記していない。合点は〔合〕で示した。「行」は真福寺本古事記の位置を示している。真福寺古事記の傍線の字について、他の写本・書の異同を示した（4の伊勢系古事記については本文に異同はない）。古事記道祥本と春璣本が同じ場合には、³⁰春璣本は省略した。神祇本源は書写年代の古い重要な三本は全て一致している。また元元集は石川忠総本の字を掲げた。「神祇本源／元元集」の欄で片方しか挙げていないのは、全て元元集の例である。×は神祇本源にも元元集にも引用がないことを示す。

1は「建依別」について、道祥本・春璣本に「速」とする旧事本紀を引く。春璣本は、さらに合点を付した「速」との傍書がある。兼永本・兼右本旧事本紀は共に、「辻依別」として傍書に「速（イ）」と記す。こうした兼永本・兼右本の傍書が神祇本源や元元集所引の旧事本紀と系統的に近似することは前論でまとめた通りだが、実際この1でも、神祇本源・元元集が共に「速依別」とする。この1に関しては、伊勢系古事記が見ている旧事本紀が、兼永本・兼右本所引異系統旧事本紀、また神祇本源・元元集所引の旧事本紀（鎌田の言う「伊勢系・旧事本紀」と一致する。

1と同様、伊勢系古事記所引旧事本紀が、「伊勢系」旧事本紀と一致する例は、5である（神祇本源と元元集に引用はないが）。しかし言い換えれば、その他の例はいずれもこの傾向にはそぐわない。以下で確認していきたい。

2は「白日別」について、伊勢系古事記が揃って「自日別」とし、春璣本のみが「白日別」とする旧事本紀を引く。春璣本は道祥本を直接写したとも考えられている写本であり、この傍書は春璣が記した可能性が高い。春璣が目にした旧事本紀は「白」であった。神祇本源は「自」、元元集は「白」としており、同様に差違があるが、兼永本・兼右本に見える「向」よりは近いと言える。兼永本・兼右本旧事本紀が引く旧事本紀は、異系統のものではない（また別の系統の）可能性がある。

3は「美蕃登」について、道果本のみが「義」とする旧事本紀を引く。現存旧事本紀は兼永本と兼右本とで本文、傍書がまた入れ替わっている。つまり、兼永本は本文を「美」としながら傍書を「義」としており、一方兼右本は、本文を「義」として傍書を「美」としている。兼永本と兼右本とで、このように本文の字と傍書の字が入れ替わっている箇所はまま見られる（前論で言及した）。異系統の本は「義」であり、兼右本がそれを採用していると考えられる。ただこの箇所を、元元集は「美」としている（神祇本源には引用なし）ため、1ほどに明確な一致は見られない。

4はカフに当たる言葉として、伊勢系古事記（傍書の「」）は分注）では「一木」の後に「替」があるのに対し（春璣本のみ「智」に誤る）、現存本旧事本紀では「謂」の次に「易」があり、語順・用字が異なる。伊勢系古事記の引用は短いが、本文と明らかに違うと思ったからこそその引用であり、その本文との差違については正確な観察がなされていると思われる。

6は「可助告」を「吉」とする旧事本紀を、道果本のみが引く。

しかし、兼永本・兼右本旧事本紀、また神祇本源・元元集の全てが「告」で一致しており、道果本のいう旧事本紀の字と合わない。7の「量」と「置」の字体は判別が難しい場合が多い。実際、道果本は本文・傍書の旧事本紀を共に「置」としており、注の意味をなしていない（傍書の旧事本紀によって、本文を「置」に訂正した可能性はあるが）。道祥本・春璣本は、共に本文は「量」として、傍書で「置」とする旧事本紀を引く。一方旧事本紀（兼永本・兼右本）は「置」とし、元元集は「量」とする。伊勢系古事記が引く旧事本紀は「置」であるが、元元集引用の旧事本紀とは一致しない。

8の「御倉板拳」を道果本は「坂」とし、傍書に旧事本紀を引いているが、そこでも「坂」となっている。傍書を含めて誤写があるのか、「坂」とする根拠として旧事本紀が引かれているのか不明だが、いずれにせよ、道祥本・春璣本も同様に、「坂」と伝えている。旧事本紀を見ると、兼永本も兼右本も、本文は「楨」で傍書は「板」である。なお元元集も神祇本源も、「板」で一致している。これもまた、道果本古事記が引く旧事本紀と合わない。

9は現存道果本に存しない箇所である。道祥本・春璣本は、本文を「埒」とし、傍書で「均」という字と、「隈」とする旧事本紀を挙げる。ところが兼永本・兼右本旧事本紀は本文を「隈」とし傍書では「埒」である。伊勢系古事記引用旧事本紀の字は、旧事本紀（兼永本・兼右本）の傍書とは一致しない。

10も道果本にはない箇所である。「比良夫具」を「天」とする旧事本紀を、道祥本・春璣本が引く（道果本にはない箇所ので、道祥本・

春璣本が一致しているので、表2には道祥本のみ掲げてある。しかし兼永本・兼右本の旧事本紀は本文を「天」として傍書は「夫」とする³²⁾。道祥本と春璣本が引く旧事本紀は、兼永本・兼右本文とは一致するが、異系統とは言えない。元元集・神祇本源にはこの段落の引用は見られない。

以上伊勢系古事記の校合で用いられている旧事本紀を検討してきたが、そもそも伊勢系古事記の傍書を、一度に全て書き込まれたものと考えすることはできない。例えば道果本と道祥本・春璣本は同一祖本から分かれて筆写されたと言われているが、道果本にのみ見える注があることは、道祥本・春璣本と分派してから付けられた注だと考えられる。また、道祥本と春璣本は直接の親子本だと考えられているが、春璣本にのみ見られる注もある。つまり、今見られる伊勢系の注記は、何度かにわたって付けられた注記群だと見るのが妥当なことである。

また、伊勢にあつた旧事本紀を考えたい本論にとって、伊勢系古事記の注の扱いは難しい。道祥は俗名を荒木田匡興と言ひ、志摩国答志郡伊神戸上村（今の三重県志摩市）に住んだ内宮の神主である。春璣は道祥の弟子で、志摩国伊雑神戸恵梨原（同上市）に住んだ福嚴坊の僧であつた³⁴⁾。道祥本・春璣本は、今の三重県伊勢市にいた僧・景観の本が親本であるが、景観本は、伊勢国度会郡宇治郷（同上市）の尾崎遍照院の僧である祐遍所持本を写したものだという（春璣本奥書）。道祥本・春璣本に引かれた旧事本紀は、広く伊勢に縁のあるものと見ることができる。

一方道果の経歴は、宮地直一や西田長男の研究で明らかにされ

ているが、書き込まれた旧事本紀と伊勢との接点は見出しにくいようである。右の表2で言えば、4・7の道果本と道祥本（及び春璣本）では、傍書の書き方がほぼ同じである（5は少し書き方が違うので、別々に付けられた注とも考えられる）。あるいは道果本と道祥本の共通祖本に書き込まれていた旧事本紀であるかもしれない。また、3・6・8は道果本にのみ見える注記である。3・4・6・7・8は参考程度に留めた方がよいかもしれない。

以上、検討できる数が少ないのであるが、伊勢系古事記引用旧事本紀が、鎌田の言う「伊勢系」旧事本紀（すなわち兼永本・兼右本の傍書や、神祇本源・元元集所引旧事本紀）と一致しないと確実に言える例もいくつかは見られた（2・5・9・10）。それならば、伊勢には複数種の旧事本紀が存していた可能性を考える必要があるのではないか。

四、伊勢系古事記所引旧事本紀の検討（2）

傍注で引用されている場合

次に、伊勢系古事記の傍書で語釈がされている箇所（以下「傍注」と呼ぶ）を検討する。旧事本紀によると明記されているものは先に検討したので除いた。傍注は全四十二例を確認したが、そのうち単なる語釈であり旧事本紀等の引用ではない可能性があるものの、及び日本書紀に基づく語釈であると考えられるものが計三十五例ある。これらを除いた七例のうち、先の表2と同じく、旧事本紀（兼永本・兼右本）及び神祇本源・元元集が一致する三例を除いた残りの四例を掲げる（表3）。

11は「知訶嶋」への注記として、伊勢系古事記に「血鹿嶋也」とある。神代紀第四段には「血鹿嶋」は登場せず、旧事本紀の国生み条には存するので、この注記は旧事本紀によると思われるが、旧事本紀に「血鹿嶋」は二箇所が登場する。一箇所目は兼永本が「直」として、傍書に「血」とする（ただし「鹿」の右傍にある。兼右本は、同じく本文を「直」とし、傍書はその「直」につけられている。もう一箇所では、兼永本が本文を「西」として「血」と傍書、兼右本は「血」である。また、元元集と神祇本源は「血」

表3

14	13	12	11	
155	124	93	84	行
神 能宇斯能 和豆良比 能宇斯能	伊都之尾 羽張	天之久比 奢母智神	知訶嶋	古事記 真福寺本
煩神也日本紀	和豆良比能宇斯能神	天之久比奢女道神也 国之久比賣女道神	血鹿嶋也／血鹿嶋也	古事記（傍書） 道果本／道祥本／ 春璣本
和內良比能宇斯能神 和良比能宇斯能神 和良比能宇斯能神イ本	和內良比能宇斯能神 和良比能宇斯能神 和良比能宇斯能神イ本	天（國）之久比賣女道神 天（國）之久比賣女道神 天（國）之久比賣女道神	①直鹿嶋 ^血 ／直鹿嶋 ^血 ②西鹿嶋 ^血 ／血鹿嶋 ^血	旧事本紀 兼永本／兼右本
和豆良比能宇 斯能神	和豆良比能宇 斯能神	天（國）之久 比賣女道神	血鹿嶋 血鹿嶋	神祇本源／ 元元集

とする。兼永本・兼右本の傍書が「血」とするのは神祇本源・元元集と一致する。伊勢系古事記引用の旧事本紀も、これと一致することが確かめられる。

12は、道果本は「天之久比奢母智神」に傍書して「天之久比奢女道神也」と注し、道祥本・春璣本は「国之久比賣女道神」の傍書で「国之久比賣女道神」と注している箇所である。アメ（クニ）ノクヒザモチは古事記にのみ登場する神で、日本書紀には見えない。これも旧事本紀による注であろう。旧事本紀は「天（國）之久比賣女道神」とするが、元元集は「天（國）之久比賣女道神」とする。道果本の「奢」は、旧事本紀とも元元集とも一致しない。道祥本・春璣本の「賣」は旧事本紀の「賣」とは異なるが、元元集の「煮」の異体であり、道祥本・春璣本傍書と元元集は一致すると言える。

13は「伊都之尾羽張」への注として、旧事本紀の国生み条に見える「稜威雄走神」との注が、道果本・道祥本・春璣本にある。日本書紀の「稜威雄走神」は第九段本文に見えるため、ここは旧事本紀による注と考えられる。兼永本旧事本紀は字が乱れているが、兼右本旧事本紀と元元集が、伊勢系古事記に見えるのと同じ「稜威雄走神」と伝えている。

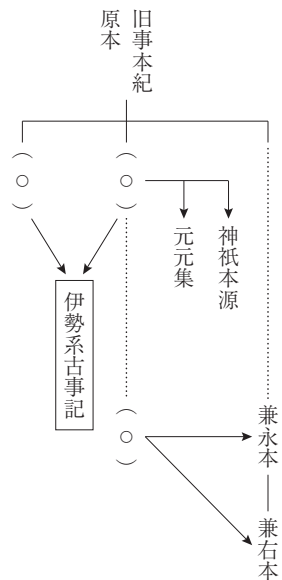
14について補足すると、まず旧事本紀兼永本の「斯」は横傍に補っている。また旧事本紀兼永本・兼右本共に、分注には全て合点がある。

14は「和豆良比能宇斯能神」に対して、道果本のみが別本によるらしい注をつけている。「宇」の字に違いがあり、本文が「宇」としているのに対し、傍注では「守」となっている。旧事本紀は兼永本・兼右本ともに分注で「イ本」注記があり、乱れが見られる。ただ、元元集所引旧事本紀は「守」となっており、道果本傍注と一致する。ただし道果本の傍注はあるいは古事記の異本との校合かもしれないため、明確なことは言いがたい。

先に同じく、11と13は道果本・道祥本（と春璣本）に共通する注であるし、14も関係するのは道果本に見えるもののみであるので、これらの例はやはり参考程度にしておくべきかもしれない。しかし一応まとめておけば、14は古事記による注の可能性があるが、11・13については、伊勢系古事記所引旧事本紀と「伊勢系」旧事本紀とは大体一致すると言える。

五、伊勢伝播の写本

以上、伊勢系古事記に書き込まれた旧事本紀本文は、神祇本源・元元集所引旧事本紀（すなわち鎌田の言う「伊勢系」旧事本紀）との関わりが見られるものもあるが、明らかに神祇本源・元元集、また兼永本・兼右本旧事本紀とも異なる場合もあるということになる。一、二の字に対してわざわざ校合したり注をつけたりしているのだから、その精度は決して低くはないだろう。伊勢系古事記では神祇本源・元元集が引用する旧事本紀に近い写本との校合も行われたが、一方ではそれとは少し異なる写本によっても校合されたのである。当然、少し異なる写本といっても、それは広く



同一系統に入る写本なのかもしれない（例えば古事記で言えば、道祥本と春璣本のような）。書き込まれた範囲からはそれ以上には絞りにくい。これまでの論と本論で述べたことを試みにまとめると、図のようになる。（ ）内の写本は一本とは限らず、およその系統位置を示している。

ただ、兼右本（・兼永本）の傍書の書き込み等と、神祇本源・元元集が引用する旧事本紀との近さは鎌田も論じており、また論者も検討したことは前述の通りである。鎌田はこれを「伊勢系」と名づけたが、伊勢系古事記引用旧事本紀の系統が不明な以上、「伊勢系」と呼称し、把握するのには問題が残るのではないか。ましてや、「伊勢系」旧事本紀との呼称が、古事記の系統論に引きずられていることを考えればなおさらである。

神祇本源・元元集が引いた旧事本紀とは、度会家行が所持していた本⁽³⁶⁾のようである。そこから、「度会系」旧事本紀と捉えてみてはどうだろうか。鎌田が「伊勢系」と呼んだ理由の一つは⑪「度

会神主」行の有無であったが、論者はその点に注目しすぎないよう検討してきたため、いささか紛らわしいし、そもそも「伊勢系」という呼び方自体、伊勢神道（すなわち度会氏関係）との関わりによることは承知している。しかし、「伊勢」ではあるが特にその一系であることを示し、古事記の写本系統との関わりを一度横に置いて考えるためにも、「度会系」などの呼び方、把握が穏当と考える。伊勢系古事記引用の旧事本紀の系統如何に拘わらず、度会氏関係の写本であることが、より明確になる。

なお、本論に関わるところで言えば、例えば道果本古事記裏書（紙背貼付）や道祥本古事記裏書も検討しなければならない。稿を改めて述べたい。

以上、通説化している鎌田純一の先代旧事本紀系統論を振り返った。鎌田論が大方は承認されているとはいっても、見直してみると実際には詰めるべき箇所がいくつもある。鎌田の切り開いた道をさらに推し進めるため、兼右本系旧事本紀の性格についてさらに考えていきたい。

- 注(1) 矢田部公望が旧事本紀を「本朝史書之始」（『日本書紀私記』（丁本）、新訂増補国史大系『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』吉川弘文館、一九六五年、一八九頁）として高く評価したことはよく知られている。
- (2) 本居宣長『古事記傳』一之卷（『本居宣長全集』第九卷、筑摩書房、一九六八年）。
- (3) 鎌田純一『先代舊事本紀の研究 研究の部』（吉川弘文館、一九六二年）。

- (4) 鎌田前掲注(3)書等。

- (5) 『弘文莊善本目録』（『弘文莊在庫古書目録』第三十号、弘文莊、一九五七年一〇月）で兼永本が紹介され、以後この四系統に分類するのが鎌田論の基本となった。これより前、鎌田の旧事本紀写本系統論には「先代舊事本紀諸本について」（『日本上古史研究』一一九、一九五七年九月）と「先代舊事本紀諸本概説」（『國學院大學日本文化研究所紀要』一、一九五七年一〇月）があるが、兼永本発見以前であり、当然系統分類は異なる。なお近年、国造本紀を中心としたものではあるが、鎌田論でとりあげられていない写本も含めて、鈴木正信が諸本をまとめ直している（『国造本紀』諸本の書誌学的検討『国造制の研究——史料編・論考編——』八木書店、二〇一三年）。

- (6) 兼永本発見後の「天理図書館蔵先代舊事本紀諸本について」（『ピブリア』一二、一九五八年一〇月）以後、石川本系は兼永本の兄弟本とされてきたが、「祐範本先代旧事本紀の奥書より」（『國學院雑誌』六四―五・六、一九六三年三月）で親子関係へと修正された。

- (7) 拙論「石川忠総本系『先代旧事本紀』の写本系統的位置」（『早稲田大学日本古典籍研究所年報』八、二〇一五年三月）。

- (8) 『先代旧事本紀』の諸本をめぐって」（『古事記学会例会発表、学習院女子大学、二〇一五年四月）。

- (9) 鎌田前掲注(6)「天理図書館蔵先代舊事本紀諸本について」、同「古事記・舊事本紀諸本の系統」（『國學院雑誌』六〇―三、一九五九年三月）、同前掲注(3)書、同「鎌倉時代における先代旧事本紀——特に伊勢・度会氏に関連して——」（『神道学』二六、一九六〇年八月）等。

- (10) 日下部勝舉「古語拾遺攷異」（『群書類従』第二十五輯、続群書類従完成会、一九三三年、一七頁）。

- (11) 池辺真榛「古語拾遺新註」（『大岡山書店、一九二八年）。

- (12) 現存諸本を全般的に分類したものとしては澤瀉久孝・濱田敦「古事記諸本概説」上・下（『帝國学士院紀事』四―一・三、一九四六年七・一二月）が早い。その後、古賀精一「古事記諸本の研究」（『古

事記大成 第一卷 研究史篇』平凡社、一九五六年)、また植松茂・古賀精一・鎌田純一「古事記諸本概説」(倉野憲司編『校本古事記』続群書類従完成会、一九六五年)等で研究が深められた。

- (13) 古賀精一前掲注(12)論等。この場合、道果本以下三本が特に「伊勢系」と呼ばれる。

- (14) 植松茂他注(12)論等。

- (15) 吉田兼俱『日本書紀神代抄』(国民精神文化研究所、一九三八年、一頁)。

- (16) 鎌田純一が表にしてまとめている(前掲注(9)「古事記・舊事本紀諸本の系統」)。

- (17) 鎌田前掲注(9)「古事記・舊事本紀諸本の系統」三八頁。

- (18) 鎌田前掲注(9)「鎌倉時代における先代旧事本紀——特に伊勢度会氏に関連して——」。

- (19) 鎌田前掲注(3)書、二七—二八頁。

- (20) 平田俊春『元元集の研究』山一書房、一九四四年。

- (21) 神仏習合研究会『校註解説現代語訳 麗気記I』(宝蔵館、二〇〇一年、二九八頁)。

- (22) 笹原宏之『日本の漢字』(岩波新書、二〇〇六年、四四頁)。

- (23) 以上の他、類聚神祇本源と瑚璉集(共に度会家行の著)にも同様のの三十二神の掲出が見られるが、今は省いた。なお「アメノムラクモ」の一行の位置は、両書とも⑬の位置である。

- (24) こうした何十もの列挙がされる場合に、偶然一行が脱落することは容易に考え得るし、実際に例えば真福寺本元元集では、④「天児屋命」行と⑮「天玉櫛彦命」行が脱落している。

- (25) 度会延佳が「脱三天主羅雲命。然則三十二神其数不足」と手沢の寛永版本で指摘しており、これに鎌田も言及はしている(前掲注(9)「鎌倉時代における先代旧事本紀——特に伊勢度会氏に関連して——」二五頁)。

- (26) 拙論『先代旧事本紀』ト部兼右本と『類聚神祇本源』引用『先代旧事本紀』(『古代研究』四八、二〇一五年二月)及び『元元集』

『類聚神祇本源』所引『先代旧事本紀』の写本系統的位置」(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』九、二〇一六年三月)。

- (27) 小野田光雄「伊勢本系古事記の特異性」(『国語と国文学』四七—六、一九六三年一月)。

- (28) 松本直樹「先代旧事本紀の「神話」——古事記神話の引用」(青木周平編『古事記受容史』笠間書院、二〇〇三年)。

- (29) 類聚神祇本源は度会家行撰の伊勢神道書で、元応二年(一三二〇年)の成立である。

- (30) 大中臣本・度会実相本(以上神宮文庫蔵、真福寺本(真福寺蔵)の三写本で、いずれも成立からほぼ五十年以内の書写である。前掲注26の二つの拙論で詳しく検討した)。

- (31) 元元集の諸本のうち、真福寺本は書写年代が圧倒的に古く(建徳二年(一三七一)書写との奥書がある)、成立当初の形を残していると考えられて重要である(平田前掲注(20)書)が、全八巻のうち巻四・五しか現存しない。特殊な第八巻をひとまず置くと、残る七巻が揃っている諸本のうち、重要と考えられるのは石川忠総本(神宮文庫蔵)であることは、前論で述べた(前掲注26)『元元集』・『類聚神祇本源』所引『先代旧事本紀』の写本系統的位置)。

- (32) 兼永本旧事本紀の「天」には見せ消ちらしきものが付けられている。兼右本の「夫」には見せ消ちなし。

- (33) 青木紀元「伊勢系古事記の注記」(『日本神話の基礎的研究』風間書房、一九七〇年。初出一九六五年)。

- (34) 岡田米夫「在伊勢古事記古写本について」(『歴史と国文学』六一、一九三二年一月)。

- (35) 『道果本古事記』(貴重図書複製会、一九四三年、宮地直一解説)、西田長男「伊勢本古事記の伝来に関する一、二の資料——道果本古事記解説補遺——」(『神道史の研究 第二 理想社、一九五七年。初出一九五二年)、同「古事記旧鈔本の書写人道果について」(『神道及び神道史』二四、一九七五年六月)。

- (36) 前掲拙論注(26)『元元集』・『類聚神祇本源』所引『先代旧事本紀』

の写本系統的位位置」。

※引用本文の出典は以下の通りである。

- ・先代旧事本紀
- ト部兼永本―天理図書館善本叢書『先代旧事本紀』（天理大学出版部、一九七八年）。
- ト部兼右本―天理大学附属天理図書館蔵、二一〇・一一イ五九。
- ・古事記
- 真福寺本―『国宝 真福寺本 古事記』（桜楓社、一九七八年）。
- 道果本―新天理図書館善本叢書『古事記 道果本 播磨国風土記』（八木書店、二〇一六年）。
- 道祥本―静嘉堂文庫蔵、五〇三函一五架二〇二六〇号。古典保存会刊 行の影印本（一九三六年）も参考とした。
- 春瑜本―神宮古典籍影印叢刊『古事記 日本書紀（上）』（八木書店、一九八二年）。
- ・類聚神祇本源
- 大中臣定美本―神宮文庫蔵、和書第一門一〇〇九一号。
- 度会実相本―神宮文庫蔵、和書第一門三六九号。
- 真福寺本―真福寺善本叢刊『類聚神祇本源』（臨川書店、二〇〇四年）。
- ・元元集
- 真福寺本―真福寺寶生院蔵、国文学研究資料館所蔵のマイクロファイル

ムによる。

石川忠総本―神宮文庫蔵、和書第一門一〇三号。国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムによる。

- ・麗気記
- 神仏習合研究会『校註解説現代語訳 麗気記Ⅰ』（宝蔵館、二〇〇一年）。
- ・神祇譜伝図記
- 神道資料叢刊『神祇譜伝図記』（皇学館大学神道研究所、一九八八年）。
- ・神祇秘鈔
- 太神宮叢書『度会神道大成 前篇』（神宮司庁、一九五七年）。
- ・続日本紀
- 新日本古典文学大系『続日本紀 一』（岩波書店、一九八九年）。
- ※本稿を成すに当たり、神宮文庫・静嘉同文庫・天理大学附属天理図書館・北野山真福寺寶生院の御高配を得た。深謝申し上げる。
- ※本論は、「伊勢系本『古事記』所引『先代旧事本紀』をめぐって」と題した口頭発表（早稲田古代研究会例会、二〇一六年三月、於早稲田大学戸山キャンパス）に一部基づいている。席上御意見を頂戴した皆様に、御礼申し上げます。
- ※科学研究費若手研究（B）（課題番号16K16771）、及び科研費基盤研究（C）（課題番号16K02236／分担研究者として）を受けての成果の一部である。